

# 場になれる



佐藤 寛子

こどもたちの帰ったあとの保育室。ママごとコーナーに敷かれた一畳の畳に腰をおろし、おもちゃのお皿やスプーンを片付けながら、ふと思った。

「たたみ、最近干していないなあ……」。

一学期、私が、二十人のこどもたちと生活をともにすることになった、この川のくみ（三歳児クラス）は、ほとんど毎日水害にみまわれた。

ママごとコーナーでは、きれいに並べられたカップやお茶碗に、ポットでなみなみと水が注がれる。水槽の置いてあるあたりでは、「めだかさん、どうぞ」と、自分のコップに水を汲んできては、せっせと水槽に流し入れている人。水槽に手を入れて、ぐるぐるかきまぜている人。水道付近では、ひたすら石鹸で手を洗い続ける人。その横では、お人形の洋服の洗濯が始まり、そのままいくと、お人形の入浴

タイムとなる。

当然、床や畳はびしょびしょで、私はせっせと雑巾がけをする。それを見て、手伝ってくれる人たち、手に手にぐっしょり水をふくんだ雑巾を持って登場。

もちろん私なりに、いろいろ努力や工夫はしてみたつもりである。部屋の中では奨励されない水も、外でなら出来る。「お水は、お庭でしましゅうね」と、一日に何度言っただろう。庭にゴザを敷いて、お茶碗やカップを並べて、青空ママごとコーナーも一緒につくってみた。手を洗っている人には、適当なところで少し早めに、「きれいになったわね」と声をかけて、タオルでふいてあげた。水槽の位置も変えてみた。めだかのえさも一緒にあげた。心情に訴える方法から、環境を変えてみる方法、私自身の保育を省みることなど、水害対策として出来ることはしてみた。それなのに、こどもたちの大量の着替えと、大量の雑巾洗い、びしょび

しょの畳干しの仕事は、私の日課になってしまった。

「川のくみはねえ、どういう訳か、毎年そうなのよ」

と、他のクラスの先生方が

声をかけてくださる。

かわ……名前のせいなのだろうか？

ある日のこと。その日は、ひどい雨模様だった。

本当にバケツの水をひっくり返したという表現がびつたり降り方だった。何気なくふと窓の方を見たときに、思わずギョッとした。ひとつこひとりないはずの庭に、確かに三つの影が過った。

「せんせい、たいへんだよ。あのね。でちゃったよ」

様子を見ていた人が、困った顔をして知らせにきた。

「ほんとね、大変。先生、三人を呼びに行ってくる



から、みんなは、お部屋で待っててね」

「あたしも、行くー」

「いっしょにいくー」

「ほくもー」

「わたしもー」

……こういうときには、やたらと団結し、一体感のある人たちである。

この非常事態を察し、駆けつけてくださったK先生が、「ここは大丈夫だから」と言ってくれ、私は三人のところへ走った。

さて、庭のびしょぬれ三人組は、というと、全力で走り寄ってくる私の姿を見つけ、ただならぬものを感じつつも、「せんせーい」なんて手を振っている。

「こんなに雨がふってるのに、お外に出ちゃってだめじゃない。みんなびしょびしょよ」

「ふふふ。せんせいもびしょびしょ」

こういうとき、こどもは妙に冷静で、テンション

の高いのは、おとなだけだったりする。

「みんな心配しているから、早くお部屋にかえりましょう」

途中で、靴が脱げたり、物を落したり大騒ぎしながら、びしょぬれ三人組とびしょぬれの私は、やっと部屋に戻った。

「おかえりー。だいじょうぶ？」と迎えられた部屋の中で、着替えをしながら、三人の中に妙な一体感があるのを感じる。まぎれもなく、同じく雨の中を出たこの私にも、それがある。この妙な一体感、私は何年か前にも感じたことがある。

\*

大学を卒業してすぐ、私は、迷わず愛育養護学校でアルバイトをすることに決めた。学生時代にここで過ごした時間、出会ったこどもたちは、私の今までの人生を見つめ直し、これからは生きていく上で大切なものとなった。もうすこし、ここで過ごし

てみたいと思つた。

愛育のこどもたちもまた、水は大好きである。

愛育養護学校のスタッフとして、はじめて幼稚部で担任をもつたときのことである。おさげのかわいい女の子がいた。なぜ彼女と過ごす時間が多くなつたのか、よく覚えていないのだが、入学したての彼女と私は、場になれていないという部分で似ていたのかもしれない。

彼女は、よく私をシャワー室に誘つた。シャワーのお湯をいっぱいに出し、肩から流す。ぬれた服を全部脱いで、裸んぼうになり、ペーパーバスにいっぱいにお湯をはつて、首まですっぽりとつかる。そこまですると、今度は私の足にシャワーを向ける。

ジーパンの裾がほんの少しぬれると、私は一瞬躊躇する。そんな様子を見て、彼女はちよつと神経質な顔つきになるのだけれど、かまわず今度は肩からお湯をかける。不思議なもので、ちよつとぬれると嫌

なものだが、いい加減ぬれてしまうと覚悟が出来てしまつて、かえつて楽しい気分になつたりする。びしょびしょになりながら、二人で長い間歌をうたつたり、話をしたりして過ごした。そのことがあつてから、私は、彼女の気持ちに少し近付けたように思つたし、彼女の方でも、この場で過ごす上での支えとして、私を思つてくれているようであつた。

彼女はよく物を投げた。誰もいない空中に投げることもあれば、明らかに誰かを狙つて投げることもあつた。狙われたこどもの恐怖感を思い、当然その子といっしょにいるおとなは、守りの動きをする。私は、物を投げることの危険性よりも、そういう行為が彼女の立場を不利にしていくことを思い、投げようとする手をギュッと押さえた。

そんなことがあると、かならず、シャワータイムは長くなった。

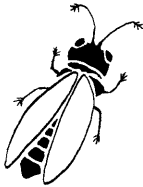
今振り返ってみると、あのときの彼女も、そして私も、あの場が自分たちのものになつていなかった

のかもしれない。自分らしく、自分のリズムで生活する場を見つけようとしている彼女。自分の思いをどうやったら、上手うまく周りに伝えていけるかと悩む私。私たちにとって、シャワー室で過ごしたあの時間は二人の関係と、自分自身のたてなおしのための貴重な時間だったのかもしれない。

\*

時に水は厄介だ。しかし、人と人、場と人との関係を和らげてくれることもある。

水に触れる、ぬれる。ぬれたことで、自分を確認する。同じようにぬれている自分以外の人、びしょびしょになった床、畳の存在を知る。自分をぬらした水と同じ水でつながっている人と場。こどもたちの執着する水に意味をもたせようとする、私の単なる憶測かもしれない



い。けれど、こどもたちは、こちらの思う以上に、新しい人、新しい場、そして日々新しい自分自身を受け入れていくことに繊細なのかもしれないと思う。

さて、最近の川のくみの水害だが、著しく減ってきている。こどもたちが、この場になれ、ちがったかたちで、自分を表現できるようにしてきたのだと思う。

そんな彼らの変化（これは、あくまでもおとなの感じ方で、こどもたちにしてみたら、本来のリズムに戻れたというところかもしれないが……）を肌で感じられた瞬間を、いつも私を支えてくださっている周りの方々と、ともに喜びあえることは、私にとっても、この場で生きていく上での大きな力になっている。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）